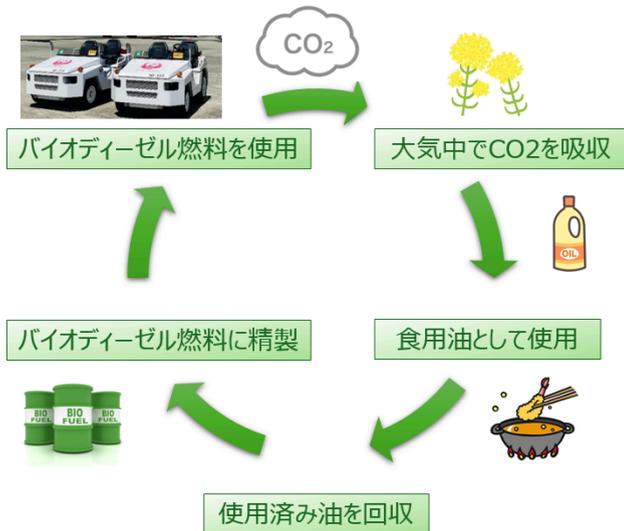


**旭川空港で初めて空港内作業車両に  
バイオディーゼル燃料「B100燃料」を使用開始**  
～新千歳空港に続き道内2例目～



JALは、2026年2月18日(水)より、旭川空港に配備している空港内作業車両であるトーイングトラクター<sup>(\*)</sup>の一部において、バイオディーゼル燃料濃度100%の「B100燃料」を使用開始します。北海道内においてはこれまで、新千歳空港にのみ導入されていましたが、道内の地方空港としては初めてとなります。

「B100燃料」を燃焼した時のCO<sub>2</sub>排出量は、従来の燃料である軽油と比較して2.62kg/LのCO<sub>2</sub>排出量削減効果があるとされています。原料となる植物が成長する過程でCO<sub>2</sub>を吸収していることから、ライフサイクル全体でカーボンニュートラルとみなされ、「CO<sub>2</sub>排出実質ゼロ」の実現にむけて効果的な燃料です。

今回旭川空港において導入される「B100燃料」は、北海道内のセイコーマートの店内調理「HOT CHEF」などで発生する廃食油を原料としてバイオディーゼル燃料を製造・販売しているセコマグループの株式会社白老油脂、ならびに豊田通商株式会社が製造・供給・配送を行うものです。

一般的にバイオディーゼル燃料は軽油に比べて寒さに弱く、氷点下5度以下の環境では凍結するリスクが伴います。便数規模が大きい新千歳空港と比べると、作業時間が短い地方空港では作業車両を温め続けるのは難しく、特に寒冷地の冬季に使用する場合には、燃料の凍結によるフィルターが目詰まりが導入の課題となっていました。

今回、トーイングトラクターに加温用ヒーターを新しく実装することで、燃料凍結のリスクが回避できるようになったため、旭川空港のような寒冷地においてもバイオディーゼル燃料の通年運用が可能となりました。

JALは、今後も旭川空港におけるさらなる対象台数・車種の拡大や、道内のバイオディーゼル燃料未導入空港への新規導入を目指してまいります。今回の運用を通じて、厳冬の寒冷地空港におけるバイオディーゼル燃料の有効性を検証するとともに、地域に根差した事業者との連携・協働による「CO<sub>2</sub>排出実質ゼロ」の実現に向けて取り組んでまいります。

(\*)空港制限区域内にて航空貨物やお客さまの手荷物運送用コンテナを牽引する車両